

# ひらがな拗音の読みが困難な 言語発達遅滞児に対する指導の検討

○宇留野 哲

（国際医療福祉大学病院）

KEY WORDS：言語発達遅滞 拗音の読み 刺激等価性

## 【目的】

拗音は基本音節文字よりも習得が比較的難しいとされており、小学校低学年の児童において特殊音節の習得が困難であることが指摘されている。特殊音節の読みに困難を示す児童に対して、拗音部分の読み音と拗音文字の対応を促す指導の有効性を示唆している(大六, 2000; 丹治・野呂・有路, 2015)。本研究では拗音読みに困難を示す言語発達遅滞児に対して、拗音部分の読み音と拗音文字の対応を促す指導を行い、未指導の拗音読みへの影響を検討した。

## 【方法】

**対象：**言語発達遅滞の診断のある男児 1 名(以下、A 児)。指導開始時の生活年齢は 9 歳 9 ヶ月で指導は月に 1 回 20～30 分で実施した。WISC-IV(9 歳 9 ヶ月)では FSIQ:84、VCI:88、PRI:87、WMI:73、PSI:99 だった。STRAW-R(9 歳 9 ヶ月)では RAN、流暢性課題では全項目 + 2 SD、正確性課題では全項目 - 2SD だった。**手続き：**BL 期(A)では A 児に拗音の単音と拗音が入った単語の音読を求めた。介入 I 期(B)では、絵→呼称課題、文字列→文字単語構成課題、絵→文字単語構成課題、単音提示→文字選択課題を実施した。介入 II 期(C)では文字提示+拗音単音提示→復唱を実施した。介入 III 期(D)では文字提示+混成分解提示(例、「し・や」→「しゃ」と実施者が音声提示)→復唱を実施した。**研究デザイン：**ABACADADA 条件で実施し、セット間多層ベースラインデザインで実施した。**従属変数：**A 児が拗音単音音読の正答率を従属変数とした。**倫理的配慮：**実施において、日本特殊教育学会の倫理綱領を遵守し、保護者に実施と結果の公表について同意を得た。

## 【結果】

Fig1 に A 児の拗音読みの正答率を示した。setA では 1 回目の BL 期の単音の正答率は 0%。介入 I 期の正答率は 50～100%で平均は 90%。2 回目の BL 期の単音の正答率は 0%。介入 II 期、III 期の正答率は 100%。3 回目の BL 期の単音の正答率は 40～70%で平均は 58.6%。4 回目の BL 期の単音の正答率は 70～100%で平均は 85.3%。setB では 1 回目の BL 期の単音の正答率は 0%。4 回目の BL 期では単音の正答率は 63.6～72.7%で平均は 68.2%。5 回目の BL 期の単音の正答率は 90～100%で平均は 93.2%。

## 【考察】

本研究では言語発達遅滞児 1 名に文字単語構成課題を行い拗音読みの指導を実施したが、拗音単音読みは獲得されなかった。その後、拗音の混成分解の復唱課題を行い、拗音読みが獲得され、未指導の拗音単音読みにも般化した。刺激等価性の枠組みに基づいて文字単音→混成分解、混成分解→音声単音が成立したことで文字単音→音声単音の学習が成立したと考えられる。

## (文献)

大六一志 (2000) 拗音表記の読み書き習得の必要条件・言語発達遅滞事例による検討・特殊教育研究, 38(2), 21-29.  
丹治敬之・野呂文行・有路桂子 (2016) ひらがな拗音の読みが困難な 2 事例に対する拗音読みの習得状況に応じた指導法の選択とその効果の検討・行動療法研究, 41(3), 239-250.

(URUNO Satoshi)

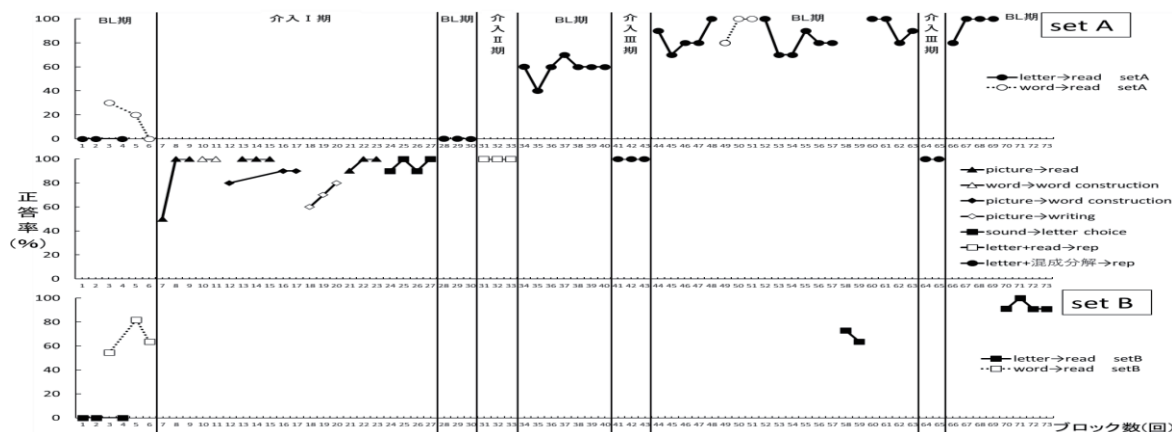


Fig. 1 A 児の拗音読みの正答率